

エルメレンス、ローレツ、マンسفエルトの 顕微鏡的医学指導

藤野 恒二郎

巨視的にみると、徳川時代の医学は肉眼的医学であった。明治維新と同時に、その上に二階だての如く顕微鏡的医学がみごとに構築された。第二次世界大戦後の医学の進歩は、分子生物学的医学。これは、三階四階五階の如く、豪華にして絢爛のさまは筆舌に尽し難いところ。

組織学に続いて細胞病理学・病原微生物学・寄生虫学の輸入と展開について、既に私は述べたことがある。(昭和五十年本学会講演)

ここでは、二冊の顕微鏡そのものの解説講義録を紹介する。

(一) 蘭医エルメレンスの「顕微鏡略説」…大坂病院教授局の講義録写本。(中山沃博士提供)。

(二) 澳医^{オウ}ローレツの「顕微鏡学」…山形医学校講義録写本(蒲原宏博士提供)。

日本細菌学事始…明治十八年(一八八五)一月、東京衛生試験所に、日本最初の細菌室が開設された。主宰者はドイツ留学より帰朝した緒方正規。(三木栄博士提供)

蘭医マンسفエルトは、長崎精得館教官として明治維新に直面したとき、長与専齋は書生の一人であった。選挙によって当選した校長・長与を認めて運営した。三年間、真面目教官マンسفエルトの特別訓育を受けた長与は、岩倉使節団に

加わり、二年間欧米の医学教育と医療制度を視察。帰朝直後衛生局長就任、十九年間続く。明治十五年（一八八二）のロ
ーベルト・コッホ結核菌発見の衝撃波を受けた長与局長は、三人の秀才に指令を与えた。ペッテンコーフェルに衛生学を
学ぶ緒方正規に、コッホ研究室での細菌学修得を指令、薬学者柴田承桂をベルリンの衛生博覧会に派遣、緒方と連絡して
細菌学研究用器械器具一式を購入させた。熊本でマンスフェルトの特訓を受けた北里柴三郎医学士を、緒方のもとで細菌
学を学ばしめた。

（箕面市）